
とある科学の黒玉住人

syobon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の黒玉住人

【Nコード】

N1313BA

【作者名】

syobon

【あらすじ】

GANTZのミッション外で死んだ和泉紫音は、何故か学園都市と言う所に居た。そして自分の部屋には、GANTZがあった。

とある科学の黒玉住人

とあるシリーズとGANTZのクロスオーバーです

主人公は、和泉紫音になります。

文章力があまり無いけどよろしくお願いいたしますm(_____)m

とある科学の超電磁砲の漫画のストーリーに沿って進みたいと思います

和泉が「死んだ」所から始まります……………

俺は、あの部屋に行かないまま死ぬのだろうか…。

「和泉君！血が…血が…！！」

女の子の音がする。

ああ…そうか。俺はこの子を庇ったんだな…

「大丈夫だ……なあ……それより……ちょっと疲れたんだ」

「え…？」

「少しだけ…寝る。起きたら大丈夫だから…一緒に…遊園地とか…
行こう…な。」

そしてここで、俺の意識は完全に飛んだ。

目覚めた場所

これが…死…か。

ジジジジジジ…

、目の前に>黒い玉くがあった。

和泉は確信した。

> GANTZくだ。

俺は、やはりこの場所が生きる場所なんだ

だが、違和感がある。

周りを見てみると、東京タワーが無かった。

東京じゃない？じゃあ此処はどこだ？

すると突然、GANTZが開いた

ガシャン！！

GANTZは開いたが、Xショットガンなど一切見当たらなかった。

どついつ事だ？。こんな現象は始めてだ

暫く凝視していると、GANTZの中から、声が聞こえた。

「…。」

和泉は更に凝視する。

あり得ない事が起きた。

GANTZの中に居た、玉男が出てきたのだ

「こんにちは。和泉紫音君」

突然挨拶をしてきた。

「お前…。」

「吸血鬼に殺られたのはこちらで把握済みです。ミッション外で殺られるなんて、思っても居なかったでしょう。」

「俺を…これからどうなるんだ…？」

「そうですね…。貴方には学園都市に行って貰います」

「は…？学園都市ってなんだ…」

「学園都市と言うのは、学生が200万人住んでいる所で、能力開発を行っています。」

「訳わかんねえ…！じゃあ今までの武器やスーツはどうなるんだよ

「！」

「安心して下さい。> 転送くする先に、和泉君専用のスーツと、今まで使っていた武器を置いておきます。」

更に訳が分からなくなった。
だが肝心な事に気付いた…。

「スーツは壊れたどうなる？一度使ったらただの服になるんだろ？」

「安心して下さい。スーツは1日に1回、自動回復をします。スーツが壊れても、和泉君が、生きていたら全て元に戻ります。」

スーツの事は安心した。だが問題はそれじゃない…。

星人だ。

「星人は…どうなる…？」

「…ごく紛れに、学生都市にも星人が侵入しています。発見したらぶち殺しても構わないです。後…」

「一般人に見られても和泉君は死にません。其処は安心して下さい。」

和泉は正直言つて驚いた。

普通なら、一般人にバレたら頭がバーンなのに、GANTZから、言ってきた。

「では…和泉君を学園都市に転送します。」

「ああ…」

玉男がGANTZの中に入って行った。

そして、GANTZ の画面に文字が浮かんできた

行ってください

と。

和泉の意識はまた途切れた

目覚めた場所（後書き）

どうも。この小説を書いているシヨボンです。

小説を書くのは初めてなんで、良かったら

アドバイスとか感想とかくれたら嬉しいです。

次回から本格的に始まります

よろしくお願いいたしますm () m

第いち話

和泉が次に目が覚めたときは、自分の部屋だと分かった。

そして自分の部屋の隅に>GANTZ<が置かれていた

黒い玉を軽く叩くと、両側が開き、中は自分のスーツと、自分の知っている武器がたくさんある・・・

その中で気になる物を見つけ、和泉は手に取ってみた

その銃は「Z」の形をしており、トリガーが2つある。

「なんだこれ・・・」

そしてすぐに、理解する。

100点武器だという事に・・・

フツ・・・と笑い、和泉はその武器を置いて、愛用の「ガンツソー」を手に取った。

やっぱり俺にはこれがいいな。

グリップの部分のボタンを押すと、刀の部分が出てくる。

ガンツソードを置いて、和泉は「ガンツスーツ」に着替えはじめた

第いちのに話（前書き）

ガンツスーツ：着ることによって、身体能力と防御能力が著しく向上する特殊スーツ。薄い素材で出来ているように見えるが、内部は特殊な液体で満たされている。ただし、耐久値が存在している。

第いちの話

数分後

ガンツスーツに着替えた後、和泉は黒い玉を再び見る

「そついえば…。何処に行ったらいいんだ…。とりあえず外に行くか…」

服を適当に取って着こなした

ふと時計を確認すると、今は7月の17日…午前11時

今の時期は夏…らしいが、何故か暑くない。

それとも「学園都市」と言う所に居るお陰なんだろうか？

なら、ちょうどいい

半袖を着るとスーツ部分が見えてしまい、カッコ悪くなる。

「行くか…」

和泉は一応 何かあると行けないのでガンツソードを持って行く事にした

第7学区

そこは中高生が中心に住んでいる場所。

1時間の間に和泉は周りを調べていた

「ああ … 大体の場所は分かったが、… 疲れた」

和泉はいつの間にか公園のベンチに座っていた

ボケーっと空を見るが自分でも何考えてるかわからなかった

「…………。ジュースでも飲むか」

独り言を呟きながら、自販機に向かう

自販機に着くとポケットから財布を取り出し1000円を入れる

この自販機は普通の飲み物は何故か並んでいない

「いちごみるく…ヤシの実茶…。…はあ。」

仕方なくヤシの実のボタンを押す

…ポチ

…………反応が無い。

「（おい。…ふざけんなよ）」

ボタンを連打するが、反応が無い

「（1000円吞まれた…。斬るか）」

腰に装備しているガンツソードに手をかけた

ガンツソードは、コンクリートや自動車や新幹線を、一刀両断出来るモノだ。

使用者の意識によって、自在に刀身の長さを変える事ができる。強度が高い特殊素材製が使われてるようである

「あの…」

「っ…！」

和泉は後ろを振り向く、中学生らしき女の子が2人居た

1人はツインテールで、もう1人は前髪にヘアピンをしていた。

「何…？」

「何か困ってんの？」

「…この自販機壊れてんの？お金入れても出ないんだけど…」

「分かった！私に任せといて！」

へアピンの女の子は自販機の前に立ち…

「チエイサー！！！」

ドゴオン！！！！！！！！！！

自販機に回し蹴りを食らわした

和泉は呆気にとられているばかりだった

「何か…最近の中学生って凄いやな」

ツインテールの女の子が和泉の顔を見る

「殿方、お姉さまの事が知りませんか？」

「ああ。知らないな……。俺、学園都市に来たばかりだし」

「私が教えてあげますわ。お姉さまは、学園都市、230万人の頂点……7人の超能力者の第3位「超電磁砲」御坂美琴お姉様！常盤台が誇る最強無敵の電撃姫ですの」

「へえ……。すごいな。俺は今のところ、こんなコメントしか出来ない」

ヘアピンを付けた女の子……。御坂が和泉を睨む。

和泉は「能力」というものをまだ此処に来て一度も見てないから、半信半疑だった

「アンタ、私を馬鹿にしてる？」

「いや、能力とか見た事無いし、どうやってそれを信じて言うんだよ」

「アンタねえ……」

御坂が何かを言おうとした時……

ドオオオオオンッ！！！！！！

物凄い爆発音が聞こえた。

「何事ですよ!?!」

「銀行からか? だったら強盗かも知れんな」

ツインテールの女の子はポケットから緑の腕章を取り出し、腕につけた

「黒子っ! 私も」

「大丈夫ですわお姉様。これは風紀委員<ジャッジメント>の仕事ですよ。ちよつと行ってきますわ」

そう言ってポニーテールの女の子・・・黒子は、爆発があった所に行った

和泉はふと、レーダーを見ると、異常な事があった

先程、爆発した所から3つほど、赤い点々が反応していた。

このレーダーは一般人には反応しない。反応するのは、星人だけなのだ。

レーダーの横にある部分のボタンを押すと、周波数変更によって装着者の姿を消す事ができるなどの機能を持っている。

「レーダーが反応している・・・。という事は銀行を襲った奴らは

星人か。フツ・・・」

「え？」

御坂が和泉の方向を見ると、和泉の姿は無かった。

「あれ・・・？こんなときに何処に行ったのかしら・・・！」

御坂は和泉を探しに行った。

第いちのさん話

銀行付近

「ジャツジメントですの！！器物破損および強盗の現行犯で拘束しますー！！」

黒子は強盗3人組に声をかける。

だが、強盗は一向に黒子の声に反応しない。

「…ジャツジメントですのー！！」

もう一度、声をかけるがやはり反応しない。

普通だったら「うわ…にげなきや」とか言っつてジャツジメントに捕まってるはずだ

「裕三君？」

「はっ？」

強盗3人組は一斉に喋る

「訳の分からない事いつまでも言っていないでさっさと捕まりなさい」

「裕三君」

「ぎいー」

「さわやかあ」

「…あれ？」

黒子は3人組の方向に空間移動>レポート<しようとするが、何故か出来ない。

すると突然、強盗3人組にあり得ない事が起きた。

「裕三君？」

「裕三君？」

「裕三君？」

と言いながら首だけを180度回転しはじめたのだ。普通の人間だつたら死んでいる

そしてここで、初めて黒子は強盗達と目が合う。

目の前の起きた事が信じられなかったので硬直してしまった。

そして…

「ぎいー…!!」

「ぎいー…!!」

「ぎいー…!!」

表情が一変した。

カアアアー…!!…!!…!!

「いつ…!!」

耳が異常に痛い。

「超…音波ですの?」

離れようとするが、能力が超音波で邪魔されているせいか上手く演算処理が出来ない。

「アアア…!!」

「アアア…!!」

「アアア…」

バチツと火花が散る音がし、何も無い空間から何か現れた

「先程の殿方…!!なんで此処に!」

和泉は素早く、ガンツソードを取り出し、刀身を伸ばして斬った

ポトツ…と言う音がし、強盗のうち2人が首を切断されていた

「…!?!」

黒子は更に凝視する。

切断された部分から 人間より少し大きな鳥が出てきて、生絶えていた。

「殿方!後ろに!」

最後の1人は和泉の後ろに居た

耳で、超音波を出そうとして、口の中で光を溜めていた

「うるせえツつの!!」

和泉はスーツに力を溜め、思いっきり殴った。

メキイイイツ　!!!!!!

強盗は地面に叩きつけられ、後頭部が割れた

「ギョエエエ!!!!!!」

身体が割れて大きな鳥が出てきた

和泉は見逃す訳が無く、ガンツソードで、斬った。

大きな鳥は、上半身と下半身が別れ、紫色の血を出しながら、生き絶えた。

「終わったか……。あっけないな。」

和泉は何事も無かったように去ろうとした。

が、目の前に御坂が立ち塞がっていた。

「説明しなさいよ……」

「何を？」

「アンタはアイツらを知っていたんでしょ？へたな事したら電撃

を撃ち込むわよ」

御坂の身体に電撃が纏い出し、今でも和泉に浴びせようとしてた。

「ちっ……。あいつは星人だ。だから俺が殺した。」

ちらつと死体を見る。舌を出し、紫色の血がドロドロ出ていた。黒子はまだ死体を見ている……

「星人……。？でもこんな非現実な事が……」

和泉はリーダーにあるボタンを押し、自分の姿を消した。

「俺は帰る……。じゃあな」

「ちよつと！！まだ話は終わってない……。ったく。」

御坂達と離れて和泉は路地裏で独り言を呟く。

「俺……。女子と話すの苦手だな……。帰るか。」

・ 和泉の一日は終わった。これから先、何が起きるか誰も知らない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1313ba/>

とある科学の黒玉住人

2012年1月6日01時52分発行